

機関番号：12603

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19720155

研究課題名（和文） 現代アルメニア・ナショナリティの形成過程

研究課題名（英文） How has the modern Armenian nationalism been formed?

研究代表者

吉村 貴之（YOSHIMURA TAKAYUKI）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401434

研究成果の概要（和文）：

現在のアルメニア共和国に位置する地域が全世界のアルメニア人エリートから民族の「故郷」と認知されるようになったのは第一次大戦後のことであるが、これは単に第一次大戦中に発生したアルメニア人の虐殺・追放によって人口重心がオスマン帝国から旧ロシア帝国に移動したからではない。むしろ、1920年代を通してソヴィエト・アルメニア政府が、旧オスマン帝国のアルメニア人エリートに経済復興の協力を要請し、一方旧オスマン・アルメニア人エリート側は、ソヴィエト・アルメニアを追われた民族政党との在外コミュニティ内での勢力争いを有利に進めるために、虐殺難民をソヴィエト・アルメニアに移住させ、在外アルメニア人社会で親ソ宣伝を行った結果、在外アルメニア人のエリート層においてもソヴィエト・アルメニアが民族の「故郷」と位置付けられるようになり、以降はソヴィエト・アルメニアの正当性が政治論争の中心となった。

研究成果の概要（英文）：

It is after WWI that Armenian intellectuals all over the world came to recognize today's Armenia as their "fatherland." This is not only because much of the Armenian population in the Ottoman Empire moved to the Russian Empire owing to the Armenian massacres during the WWI. It is rather because during 1920's the Soviet Armenian government demanded the Ottoman Armenian elites cooperate to rebuild the Armenian economy, while they aided the refugees of the Armenian massacres in moving to Soviet Armenia and executed the pro-Soviet propaganda in order to defeat the Dashnak Party defecting from Soviet Armenia to the Armenian communities abroad.

As a result, the Ramkavar Azatakan Party, consisting of the former Ottoman Armenians, admitted Soviet Armenia to be their "fatherland," and then the Armenian foreign politicians mainly argued over the legitimacy of the Communist Party of Armenia as leader of the Armenian nation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000

2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,600,000	540,000	3,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：世界史、ナショナリズム論

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象であるアルメニア人はロシア帝国とオスマン帝国にまたがって居住していたが、その社会は第一次大戦によって解体した。オスマン帝国側ではアルメニア系住民が虐殺・追放され、ロシア帝国側では革命後短命に終わったダシュナク党政権による独立アルメニア「第一共和国」(1918-20)を経てアルメニア・ソヴィエト社会主義共和国(ソヴィエト・アルメニア)が成立するといった激変する政治環境の中で、ソヴィエト・アルメニアは、国外の同胞をも巻き込んで新たなナショナル・アイデンティティを模索することになった。

2. 研究の目的

現代のアルメニア・ナショナリティは1920年代にその原型が見出せる。ただし、在外アルメニア人の社会はホスト国での同化と異化の間を振幅する過程を経ることになる。その過程においてソヴィエト・アルメニアの在外社会に対する宣伝や動員が大きな役割を果たしている点は重要である。一方、ソヴィエト・アルメニアそのものも、ソ連体制内での「民族共和国」という擬似国民国家を形成していたために、ソ連邦政府の政策によってその性格は変貌し続けた。本研究では戦間期ならびに第二次大戦直後のアルメニア人社会におけるナショナリティの形成過程を、ソヴィエト・アルメニ

アの政策ならびに本国と在外アルメニア人コミュニティとの相互交流や軋轢を通して明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では第一次大戦から1920年代のアルメニア知識人の「アルメニア領域」論、「アルメニアの故郷」観の変化を追うことで、それまで多様に存在していた「アルメニア」像が政治的環境の激変の中で徐々に一つの具体的な像(すなわち現在のアルメニアの領域)に集約していく過程を描く。なぜなら、アルメニアは長い間独立国ではなかっただけに、その領域や文化的中心についての議論の中に同朋意識や国民意識形成の過程が表れやすいからである。明らかにしたいことは、在外アルメニア人コミュニティ内でソヴィエト・アルメニアを民族の故郷として承認する勢力としない勢力との間に起こった論争に表れた民族の帰属意識の問題である。

また、1920年代のソヴィエト政権側には、一方でザカフカース(南コーカサス)地域の諸民族共和国の連邦化を求めながら、他方で在外アルメニア人コミュニティではソヴィエト・アルメニアが「故国」として認知されるよう、民族主義的な対外宣伝も行わなければならないという至上命題があった。こうしたソヴィエト・アルメニアのエリートにおける「アルメニア」、「アルメニア人」意識の変容を検証する。

1920年代の在外アルメニア人コミュニテ

ィ内には旧オスマン帝国出身の民主自由党と旧ロシア帝国出身のダシュナク党とが勢力を張っていて、前者はソヴィエト・ロシアを支持し、後者はソヴィエト政権と敵対していた。この両者はソヴィエト・アルメニアを承認するか否かで論戦を繰り広げることで、それぞれが在外アルメニア人コミュニティ内の支持基盤作りを行ってきた。つまり、形式的には「国家」であるソヴィエト・アルメニアを後ろ盾にして在外アルメニア社会を支配しようとした民主自由党と自力で在外アルメニア社会を統合して、さらにはかつて自分達を追放したソヴィエト・アルメニアを打倒しようとするダシュナク党という対照的な民族統合論・国家建設論が提示された。本研究では、当時のコミュニティ紙、民族政党的の文書等を活用してこの両者の論争に表れた民族観、国家観の違いを描く。

4. 研究成果

ロシア帝国が解体した結果、1918年5月に成立したアルメニア民族政党ダシュナク党のアルメニア共和国（第一共和国）は、近隣地域からの難民が流入し、経済的にも疲弊していた。1920年12月にその領域に成立したソヴィエト・アルメニア（アルメニア・ソヴィエト社会主義共和国）のアルメニア共産党政府は、経済復興のためにオスマン帝国のアルメニア人政党である民主自由党ならびに同党を支援する資金力豊富なアルメニア慈善協会を利用しようと同党に接近し、アルメニア救援委員会をソヴィエト圏外にも設立することに成功した。

一方、民主自由党は、第一次大戦中のオスマン帝国下でアルメニア人の虐殺や追放が起こり、その社会が解体したために自らの勢力基盤を失い、23年のローザンヌ会議までには独力で「アルメニアの故郷」を建設するのを断念した。さらに、もともと民主自由党の

勢力圏であった地中海沿岸や西欧のアルメニア人コミュニティに進出して来たダシュナク党に対抗するためにも、ソヴィエト政権に接近し、影響力を及ぼす必要があった。そのため、民主自由党やアルメニア慈善協会は、オスマン帝国周辺に逃れていたアルメニア系住民がソヴィエト・アルメニアに移住する手助けを行い、欧米のアルメニア人社会にはソヴィエト・アルメニアがアルメニア人にとっての理想的な「故郷」であると宣伝し、義捐金や技術・医療支援団をソヴィエト・アルメニアに送り込む窓口となった。この両者の接近で、それぞれと対立していたダシュナク党は孤立することになった。

また、アルメニア共産党は、未だグルジアやアゼルバイジャンに残っているアルメニア系住民に配慮し、ザカフカースのソヴィエト三共和国の連邦化を望んだが、1922年3月に成立したザカフカース社会主義ソヴィエト共和国連邦は、グルジアの抵抗で当初から形骸化していた。こうした状況下で民族エリート育成を行うために、23年11月にダシュナク党の反共勢力が去った後も国内に残存していた旧党員を共産党に取り込んだ。

結局のところ、「第一共和国」とソヴィエト・アルメニアは、支配者こそ入れ替わったものの、軍事バランスという偶発的な要素によって暫定的に引かれた領域が徐々にアルメニア人の民族的「故郷」として実体化する途上に存在した連続体であったと言える。殊にソヴィエト・アルメニアは民主自由党とアルメニア共産党との思惑の交差の上に「アルメニアの故郷」としての体裁を整えていくことになる。

一方、国外のダシュナク党は25年の党大会で明確な反共路線を打ち出し、故国奪還を目指した。1920年代の後半になると、アルメニア人エリート層の中で、旧オスマン帝国

をアルメニア人の「故郷」として旧ロシア帝国のアルメニア人社会は自らのアイデンティティには含めないとする考えは後退し、以後は「アルメニアの故郷」に位置するソヴィエト・アルメニアの正当性をめぐる議論が国内外のエリート層における政治上の論点となった。

なお、史料の物理的な制約から、ソヴィエト・アルメニア政府がザカフカース連邦構想の頓挫から民族エリートの育成や在外同胞の呼び寄せへと政策転換する過程、ならびに第一次大戦後の在外アルメニア人庶民の「本国」に対する認識の変化を、明らかにすることが出来なかった。今後は行政文書や市民の投書が掲載された新聞が多く残っている第二次大戦後のソヴィエト政権の「祖国帰還」運動に焦点を当てることで、考察の対象をエリート層だけでなく、アルメニア人社会全般に拡げることとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 吉村貴之、「アルメニア人虐殺をめぐる国際政治～虐殺承認問題とナゴルノ・カラバフ紛争～」、『民族紛争の背景に関する地政学的研究』平成20年度報告書、209-225頁、2009、査読あり
- ② 吉村貴之、「パリ講和会議とアルメニア問題」、『現代史研究』、54、35-51頁、2008、査読あり

[学会発表] (計7件)

- ① 吉村貴之、「現代アルメニア政治に見る「本国」と在外同胞」、ロシア・東欧学会、JSSEES2010年合同研究大会(2010年10月24日、天理、天理大学)
- ② 吉村貴之、「第二次大戦後のアルメニア人帰還運動」、国際中東欧学会(ICCEES)第8回世界大会(2010年7月30日、スウェーデン、ストックホルム市国際会議場、英語による発表)

- ③ 吉村貴之、「アルメニアとトルコの『歴史的和解』はなるか」、国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義以降の社会変容—比較民族史的研究」(2009年11月28日、大阪、国立民族学博物館)
- ④ 吉村貴之、「戦間期ソヴィエト・アルメニアの故郷宣伝」、「黒海地域の国際関係」シンポジウム(2009年10月1日、トルコ、ボアジチ大学)
- ⑤ 吉村貴之、「アルメニア人虐殺」、日本平和学会2008年度秋季研究集会(2008年11月23日、愛知、愛知学院大学)
- ⑥ 吉村貴之、「アルメニア人虐殺をめぐる国際政治」、大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」複合領域第1回研究会(2008年6月14日、大阪、千里朝日阪急ビル)
- ⑦ 吉村貴之、「祖国の創出：第一次世界大戦後の現代アルメニア・ナショナリティ」、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」総括シンポジウム「スラブ・ユーラシア学の幕開け」(2008年1月26日、東京、日本教育会館)

[図書] (計6件)

- ① 石田勇治、澤正輝、松村由子、ユルゲン・ツィンメラ、川喜田敦子、デイヴィッド・コーエン、吉村貴之、廣瀬陽子、長有紀枝、竹内進一、ベン・キアナン、福永美和子、クロス京子、渡部真由美、佐藤安信『ジェノサイドと現代社会』、勉誠出版、2011、165-194頁
- ② 吉村貴之、立花優、須田将、湯浅剛、見市建、井上あえか、掘抜功二、吉川卓郎、福富満久、辻上奈美江、松本弘、大川真由子、横田貴之、鈴木恵美、青山弘之、北沢義之、吉岡明子、坂梨祥、澤江史子『中東・イスラーム諸国民主化ハンドブック 2010』、人間文化研究機構地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2010、305-319頁
- ③ 臼杵陽、山口昭彦、吉村貴之、小松久男、中西久枝、宮治美江子、中山紀子、宇野昌樹、新井和広、大川真由子『中東・北

アフリカのディアスポラ』(叢書 グローバル・ディアスポラ 3)、明石書店、
2010、75-110 頁

- ④ 吉村貴之『アルメニア近現代史』、東洋書店、2009、全 63 頁
- ⑤ 白杵陽、鈴木慎一郎、赤尾光春、吉村貴之、荒井幸康、浜邦彦、早尾貴紀、丸川哲史、木村自、王恩美、金友子、洪貴義、本山謙二、ロジャーズ・ブルーベーカー『ディアスポラから世界を読む』、明石書店、2009、80-113 頁
- ⑥ 黒木英充、石田勇治、吉村貴之、廣瀬陽子、清水明子、天川直子、武内進一、小副川琢、菅瀬晶子、古矢旬『「対テロ戦争」の時代の平和構築』(シリーズ『未来を拓く人文・社会科学』)、東信堂、2008、43-61 頁

[その他]

ホームページ等

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/aa-projects_yoshimura.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

(1)

吉村 貴之 (YOSHIMURA TAKAYUKI)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：40401434